

売
玉

天才王子の
赤字国家
再生術

特別短編
『ランキング』

鳥羽 徹 イラスト：ファルまる



「俺って全体から見ると、どのぐらい人気なんだろう」

ある日、ナトラ王国国王太子ウェインはそんなことを呟いた。

「何の話？」

首を傾げるのは補佐官にして幼馴染おさななじのニームだ。

「いやほら、俺って国民に何かと人気じゃん？」

ウェインの言葉は自画自賛じがじさんというわけではない。

次代の王として八面六臂はちめんろつぴの活躍をするウェインは国民の人気者だ。

「それでたとえば古今東西ここんとうざいの王様から選ぶ……そう、『この王様がすごい！』ランキングみたいのが

あつたとして、俺の順位は何番目くらいかなって」

「ランク外だと思っわ」

「もう少し手心を加えてくれないと思っんで
すよニニムさん！」

ウェインは叫んだ。

「いやそりゃ確かにさ、歴代の王様とかと比べる
とだいぶかなり結構知名度とか人気とか足りない
と思っけど、話題の新進しんしん気鋭きえいを集めた新人王ラン
キングみたいのがあればいいところ行くんじゃない
かなって」

「具体的にはどのくらい？」

ウェインはしばし考えて、

「……四位ぐらい？」

「はっ」

「鼻で!? 今鼻で笑ったなこんちくしょう!？」

「確かにウェインは人気があるのは認めるし、も
しかしたら良い順位につけられるかもしれないわ。
けれどそれ以前の問題があるでしょ」

「問題って？」

「ウェイン、王様じゃなくて王太子」

「……おお」

ウェインはナトラ王国王太子。

王子様であって、まだ王様では無いのである。

「だ・け・ど、ここんとうざい古今東西の王様に負けない王に

なりたいという姿勢は素晴らしいものだと思っわ。
家臣として、全力で協力すべきよね」

「あゝすっげー嫌な予感がする。急にお腹が痛くなってきたから明日にしない？」

「だめよ」

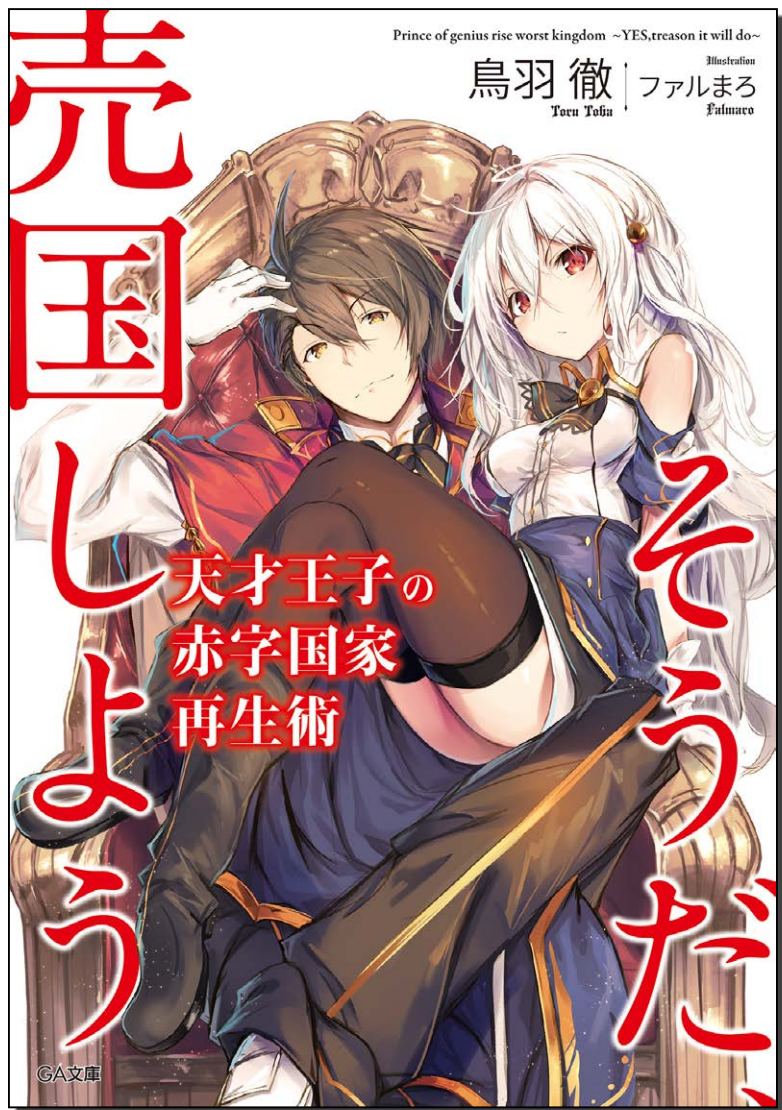
ドン、と目の前に山のような書類が積まれた。

「さ、ランキングに載るような偉大なる王への第一歩として、仕事に励みましようか」

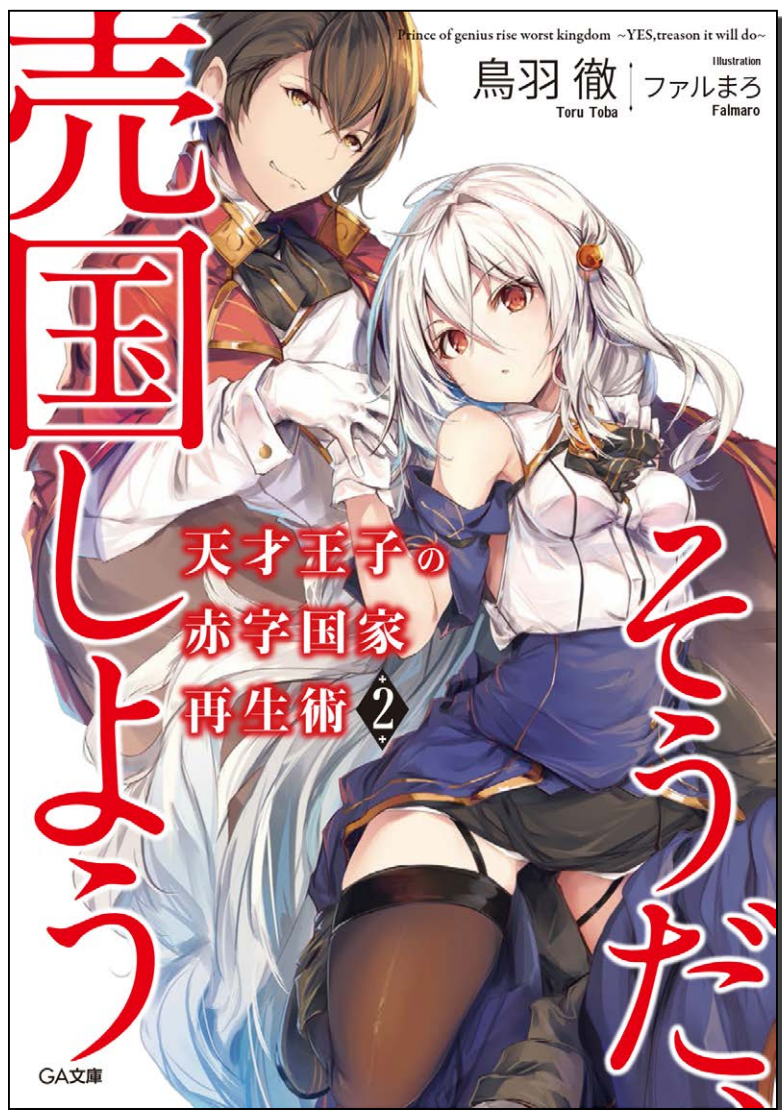
「そうなりますよねええええええー！」

かくして藪やぶをつついて蛇を出したウェインは、それからしばらく大量の書類仕事に追われるのであつた。

待望の第3巻は2019年1月発売予定!!



第1巻&第2巻
大好評発売中!!



「天才王子の赤字国家再生術」そうだ、売国しよう」
完全に詰んでる弱小国家を
やる気の無い王子が導く!